+博論書式 3(論博書式 3)

令和 元年１２月２日

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分　　野	理学療法学分野
学籍番号	17S3054	院生氏名	古谷　友希
通学キャンパス	東京赤坂キャンパス		
論　文　題　目	回復期整形外科リハビリテーション病棟入院患者における身体活動量の変化と運動療法介入の試み		
審査結果（枠で囲む）	合格　　不合格		

＜審査結果の要旨＞

１．主論文について

本研究は、回復期リハビリテーション病棟で整形外科疾患にて入院している患者を対象として、入院時の身体的特徴(サルコペニアの有無)による日常生活活動(ADL)と身体活動量の変化について検討し、それを基に運動療法介入による影響を検討している。研究方法は、国際医療福祉大学研究倫理委員会の承認（承認番号 17-Ig-085）を得て実施しており、開示すべき COI も存在していなかった。

研究 1 は、整形外科疾患で入院中の患者 69 名（男性 24 名、女性 45 名、平均年齢 82.1±7.9 歳）を対象に、FIM 運動項目(mFIM)の変化とライフコーダ GS にて測定した身体活動量の変化を、入院時、入院 14 日目、入院 28 日目で比較検討したところ、mFIM に比べて身体活動量が遅れて回復することが明らかとなった。特にサルコペニア(下腿最大周径：男性 30cm 未満,女性 29cm 未満)を有する患者では、mFIM と身体活動量の改善がサルコペニアを有さない群に比べてゆるやかな傾向が認められた。

研究 2 では、対象者 75 名（男性 27 名、女性 48 名）のうち 6 名(男性 3 名、女性 3 名)に、通常のリハビリテーション介入に加えて、アメリカスポーツ医学会の指標(OMNI-RES)に基づくハーフスクワット(介入)を 28 日間行わせて、身体活動量の変動を検討したところ、14 日目で介入を行わなかった群の変化量と比較して有意に上昇していた。

以上の結果から、サルコペニアを生じやすい高齢整形外科疾患の回復期では、積極的に個人に適合した量での運動介入療法が、身体活動量を上昇させ、ADL 向上に役立つと、結論している。

本研究の新奇性は、回復期入院患者で経時的に mFIM と身体活動量を計測し、サルコペニアを有しても運動介入を積極的に行うことで、ADL の改善が期待できる可能性を明らかにした点で、今後の線形外科疾患への入院リハビリテーションの手法や在宅高齢者の ADL 向上への指針を示すことに貢献する研究として評価できる。

２．審査経過について

審査に先立ち副論文の審査を行い必要要件を満たしていることを確認した。審査会は 1 回(2019 年 11 月 26 日)実施し、用語の定義、測定プロトコルの明確化、論文題目と研究内容との整合性、結果と考察および研究限界の整合性について質疑応答を行い、問題ないことを確認した。ただし、論文に修正が必要であったため、後日数度の論文修正の提出を求め、最終的に適切に修正したことを確認した。

３．口頭試問の結果

口頭試問においては、適切に研究内容について回答し、この分野の知識を十分に得ていることが確認できた。

以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士（保健医療学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。

論文審査担当者		
	主　査	後藤　純信
	副　査	渡邉　観世子
	副　査	河西　理恵